

平成三十年度 国語 (文学科 日本語日本文学専攻) 解答例

一 (二〇〇点)

問一 ① まさつ ② ききゆう ③ 現象 ④ わかげ (わかぎ) ⑤ 田舎 ⑥ かじよう
⑦ 虚勢 ⑧ 徹底 ⑨ 作為 (作意) ⑩ こんせき ⑪ 洞察 ⑫ 獲得

問二 ア 精神と肉体の根元が一つであること イ 自分がのけ者にされているという意識
ウ 逆に見える二つが根本では関係していること エ 自分で自分の正当性を主張すること

問三 三島由紀夫が太宰治を嫌うのは、自分に似ているからこそであるということ。

問四 太宰の作品は、若い時に必ず影響を受けるものだが、否定することが大人の証と見なされる文学であること。(四九字)

問五 『人間失格』がベストセラーとして読み継がれていることは、太宰に「幻滅」することが半世紀以上続いているのであれば、本来おかしなことであるから。

問六 太宰治の作品は、「大人」の世界への反発を覚える読み手にとっては「わからない」ことを告白することで大人の偽善を照らし出すものであり、便利な自己弁護、自己救済の書となるが、成熟した読み手にとっては、謙虚に見えるながらその実は開き直り、自己弁護しながら周囲への批判を展開する仕組みを持ったものとみえるから。(一五〇字)

問七 自分の分相応の能力

問八 「大人」たちの偽善を照らし出していく(一八字)

問九 書き手が「人間」についての見通しを持ちながらも、意図的に「わからなさ」を演出することで、他者との距離を確保する仕組み。(五九字)

二 (六〇点)

問一 ① 同程度だ、優劣が付かない ② お弾き申し上げる、演奏し申し上げる
③ 調律する ④ 曲、演奏法 ⑤ 憎らしいほどにすばらしい ⑥ 鳴り響く、響き渡る

問二 A 右大将のぬしから 帝への敬意

B 作者から 帝への敬意

C 作者から 右大将のぬしへの敬意

- D 作者から 帝への敬意 帝から 仲忠に 琴が移動
E 作者から 院の帝への敬意 涼から 院の帝に 琴が移動
F 作者から 帝への敬意 帝から 涼に 琴が移動
問三 ア 帝をはじめ申し上げて、一座の人々はたいへんお驚きになる。
イ 降るとたちまちに消えてしまった。
問四 ウ 夜明けの淡い光の中に、ほんのりと見るだけでも飽きることはない。中の乙女をしばらくでもひきとめてほしいものだ。
(古今和歌集) ↓ (うつほ物語) ↓ (小倉百人一首)

三 (四〇点)

問一 イ ウ

問二 金属・石・草木・絹・麻・五穀やいろいろな材料は実用に適しているが、使っているうちに傷み、

問三 賢不肖の得る所、各其の才に困り、

問四 天分。素質、見識、などでも可。

問五 「金石草木糸麻五穀六材」は物体として使い切ると何も残らないが、それに比べ書物は読み終えてしまっても書かれた内容が頭にずっと残る。